

## 「多文化共生タウンの創造

### ～在日経験と海外コリアンの生き方から学びの可能性」

---

原尻英樹 立命館大学産業社会学部教授

#### ■資本主義と信仰

「マックス・ウェバーという学者がいて、資本主義の発達には、実はプロテスタンティズムが大きく関わっており、この宗教のおかげでプロテスタンティズムのおかげで、資本主義が発達したとされています。一生懸命に働くようになるためには、この宗教の力が必要だったということですよね。でも、日本にはプロテスタンティズムはありませんよね。では、どうして資本主義が発達したのでしょうか？」一万円札になる予定の、渋沢は、「論語と算盤」という本を書いており、商売には論語の考え方、倫理が前提だと書いていますが、実は、儒教ではなく、日本の場合、神道、アニミズムが重要な役割を果たしています。これが、単に資本主義の発達だけでなく、外国人との共生的関係に結びついています。

もともとの神社というのは、建物などなく、祭りの行われるときに、簡単な掘っ立て小屋をたてただけでした。今のような神社の建物は仏教が入ってきて、寺の影響で造られたのです。神社にはご神体がありますが、その多くは、大きな木や岩などです。このご神体自体には実は何の意味もなく、自然のあり方を表しているだけです。人々は自然に畏敬の念を持ち、自然の摂理に身を任せ、その自然の摂理のなかで働いている八百万のカミガミを崇拝します。お天道様に申し訳ない、というように、ルールに反したことはできません。実際、みんなに迷惑です。アニミズムには、このようにプロテスタンティズムで信仰されているような人との関係、社会のあり方と同じような側面があります。実際は、プロテスタンティズム自体が、アニミズムに基づいている、というキリスト教信者ならば、想像できないような、側面があります。

これに続けて、日本語で、儲かるという言葉は、信じる者同士で取引をして、結果的に儲かるという意味になっており、江戸時代までは、ずっと、共生的な信頼関係のある者同士で、お互いに儲かる関係で、金を儲けていました。有名な、近江商人もこの考え方です。自分だけが儲かればいいという考え方は、アニミズムの考え方に反しており、こういった考え方はもともとありませんでした。

また、下記に出てくる、アニミズムに基づく、無縁仏の信仰は、別名、「エビス信

仰」とも呼ばれ、どこの誰か分からない死んだ人が、漁師を助け、大漁をもたらしてくれることを意味します。日本においては、事実上、縁の人々は誰もおらず、すべての人々が有縁であって、見ず知らずの人も無縁ではありません。死んだ人が自分の先祖であれば、先祖が自分を見守り、先祖から何らかの示唆を受けることもできるわけです。ここには、死者と生者とのコミュニケーションが語られておりそのコミュニケーションには無縁の人々も関わっています。どこの誰だかわからない人が、生きている人々と関わり、死者から恩恵をこうむることになります。

## ■ 縄文・弥生時代以来の共生関係の歴史

日本の歴史のなかで、縄文と弥生時代はかなり特殊です。通常、征服王朝が支配をするのですが、縄文人と弥生人は争った形跡がなく、争いは弥生人同士の縄張り争いしかありませんでした。現在でも、山口の祝島と大分の姫島では4年に一度、共同開催の祭りを行っています。姫島では黒曜石も産出されており、朝鮮半島の新羅からの渡来人の里です。国東半島あたりも同様で、宇佐八幡もこの系統になります。同じく、出雲も新羅系です。祝島は私も二度調査に行きましたが、つい最近まで丘の上に人々は生活していました。これは縄文人の生活形態です。そして、姫島からは麦が伝わったと伝承されています。中国及び朝鮮半島の人々、弥生人によって水田耕作がもたらされましたが、農業一般の影響があったとみられます。姫島の海難者を助けたために関わりが出来たことになっています。一応、千年以上前のことになっていますが、恐らく、縄文末期以来のことでしょう。縄文末期以来、ずっと、姫島と祝島は共生の関係を維持しています。日本における多文化共生の原型はここにあります。

それから、ずっと、この関係は維持されており、元寇で中国南部から志賀島の攻撃でやってきた人々も現地では知り合いがいたので、つまり、中国、宋の人々になりますが、争いをしなかったといえます。よって、志賀島は略奪から逃れました。モンゴルが負けたあとの捕虜になった中国江南の中国人は、「同胞だから釈放」になっています。当時、博多には宋からの商人もいたので、有力者からの関与もあったと考えられます。今でも朝鮮まで、祖父、祖父の父親まで行っていたという伝承がありますから、朝鮮、つまり高麗からの人々も現地の人から助けられたでしょう。現地での伝承では、高麗は自称でその前の高句麗とも言っており、これは朝鮮語でコグリョといいますが、最初の二字がコグになります。この名前からコガという姓になり、九州北部に一般にある古賀が始まったとされています。真偽のほどは別にして、実際にこのときに朝鮮から来た高麗の人々がそのまま日本に定着したということは確かでしょう。こうなったのは、それまで朝鮮からの人々が往来していたからだといえるでしょう。

次にあった一大事件が豊臣秀吉による朝鮮出兵です。世界最高の鉄砲生産量だった日本は、朝鮮及び明と戦っても、戦い自体はかなり有利だったと考えられますが、そのあとの補給については何も考えられていなかったため、戦いに勝っても退却することになりました。加藤清正の通訳になり、その後加藤清正とともに、熊本に入った人物に、金官という人物がいます。これについては現在、熊本城の隣にある加藤清正神社に行くと、そこの二番目の神にこの金官がいます。朝鮮からの朝鮮人が日本で神になったということです。また、当時朝鮮に日本語の出来る人々がいたということでもあります。反対に、加藤の部下であった朝鮮語ではサヤカという人物が、朝鮮に帰順して、金の姓をもらい、「日本金氏」の祖先になっています。当時の武家には、渡来系だと自称する者もいた（百済から来たという大内氏など）ので、その関係で、朝鮮人に戻った可能性もあります。こちらは日本にいた人間が朝鮮で「神」になった事例になります。明治以後の政策である朝鮮人を日本人にしてしまうことなど、この時代には考えられないことでしょう。日本と朝鮮の実際の関わりは、江戸時代まで続き、九州北部、下関、鞆の浦にいたるまで、同年齢の人々のことを現地ではチングーといいます。これは韓国語で友だちの意味です。恐らく、朝鮮人がここまで来ていたのでしょう。兵庫県の室津では、同じような人々を朋友と呼びます。これは、中国語で友だちの意味です。西国大名の参勤交代の通り道でしたから、恐らく、長崎の中国人を伴って来ていたのでしょう。通常、瀬戸内海では朋輩という言い方が一般的です。壱岐では、ドシ（普通の日本語では同士）、ホーベー（朋輩からの言い方）、それにチングーという言い方が同年齢集団の呼び方になっています。平戸もそうですが、朝鮮人は鯨組の労働者で江戸時代も来ていたようです。

もともとは他所からの人々と共生の関係をつくっていたのが本当ですが、明治以後、欧米列強の脅威への対抗のために、この一大原則が崩され、台湾、朝鮮、満洲、南洋諸島を植民地化しました。五島、壱岐、それから姫路沖の坊勢島でもそうですが、自分の先祖のみならず、ご近所の先祖、それから必ず、無縁仏の供養を、毎日、毎朝、女性たちがしています。壱岐では、海難者の大半が朝鮮人だということを分かった上で、200年、300年、ずっと供養をしています。これが日本のみならず、東シナ海域では当たり前のことです。This is Japanです。供養は、もちろんいずれわが身になるという危機感が前提になっているが、それだけでなく、どこの誰か知らない人が、自らの兄弟姉妹であるという考え方に基づいているといえよう。これですよ、多文化共生の考え方の原型は。

日本の植民地時代の朝鮮満州には、日本人も出向いており、朝鮮人と一緒に生活していた日本人もいました。いろんな日本人がいて、日本政府のいいなりになっている日本人もいましたが、朝鮮人を抑圧し差別することが、「人の道」に反するとして、

人間をやめなければならないので。朝鮮人差別をしない人もいました。満洲、朝鮮にいた日本人が朝鮮人と平等な関係を作っていた人々が、日本敗戦後、朝鮮人から助けられ、恩返しをしてもらったことも歴史的事実です。ソ連が満洲に侵攻し、日本人が虐殺、拷問、強姦が行われましたが、それを避けて朝鮮人の村に逃げ込んだ人々が、そこで 2, 3 年過ごして日本に帰国いた例も相当数あります。これらの日本人は別段偉かったのでも良心的でもなく、それまでの日本人と同じだっただけのことです。

## ■補足説明

古代は現代ではないので、古代の状況で考えなければならないでしょう。例えば、高句麗、新羅、百済、そして倭は、すべて日本にも朝鮮半島どちらにもいました。そして、日本の豪族も、それぞれ、朝鮮半島の国々と関わりがありました。縄文時代から後の弥生人になる人々は日本に来ており、しかも倭人も朝鮮半島及び中国江南にも出ていました。弥生の前になってから、水田耕作のためにある一定の数の渡来人が来ただけのことです。ヤマタノオロチは、縄文とは無関係であり、出雲大社、つまり新羅系のカミが蛇であったことと関わり、それと対抗している百済が、大和朝廷とともに、伊勢神宮を天皇に関わるカミとして祀っています。大和朝廷が確定する以前は、百済、新羅、高句麗といりみだれて、豪族が様々な関わりをもっていました。大和朝廷が確立されると、蝦夷、隼人などが邪魔になってきて、一応、縄文と弥生はこの時代になると相当混交が進んでいたのですが、形式上は、この二つは縄文系の「部族」になるでしょう。後のアイヌは、この蝦夷の一部だといえるでしょう。つまり、大和朝廷確立後に、「縄文系」の蝦夷と隼人排除に動いたということです。朝鮮半島だと中国サイドから楽浪郡が作られ、蛮族支配が行われ、その蛮族が独立することで高句麗が出てきました。日本はそのようにはなっていません。つまり、縄文と弥生は共生関係にあったといえます。また、関東武士は騎馬をやりましたが、これも高句麗のやり方が入ったからです。修験も、今でも見たら分かるように飛んだり跳ねたりするように、南部（今の福建省など）の動かし方ではなく、北方系であり、これも朝鮮半島系からきた人々です。つまり、最初から、ヤマトなり、日本なりを「ある」と考えるとまったく違ってきます。この時代は、多文化・多言語は当たり前であり、現在の東南アジアと似た環境条件になります。大伴旅人は中国語ができて、中国の官僚がつくった歌に基づいて、「令和」をつくったのであり、ヤマノウエオクラ、カキモトノヒトマロは百済人です。この当時の知識人は言語を複数できたのです。今の感覚では昔は分かりません。